第 1 章　邪悪な三位一体

二十世紀にヨーロッパで独裁国家が出現した時、日本ではこれを海外から輸入する必要はなかった。日本には日本独自の独裁国家があった。独裁ではなく、立憲君主制と呼ばれていた。確かに日本には憲法も君主制もあるが、人民はどちらからも恩恵を得ることは殆どなかった。憲法と君主制は、その大元である天皇とともに、日本が世界でも最も奇妙な独裁国家であることを隠している。

大日本帝国を治めているのは誰なのか？記者会見でこのような質問をした人はいない。これは困惑させる質問だからである。しかし、もし、報道官の石井康やその後任が回答を強いられたら、答えは決まっている。天皇だと答えるだろう。日本人全てが天皇だと答えるだろう。しかし、それは違う。ドイツ人とイタリア人なら、実際に国を動かしている人をすぐに答えられるが、日本人の中には、何と言ったらいいのか分からず答えることができない人がいるかもしれない。憲法によれば、「大日本帝国は万世一系の天皇が統治する」とある。理論的には天皇が絶対的な権力を持つことになるが、奇妙にも、それらのほとんどは実行することが許されていなかったのである。

日本人はしばしば、日本は世界の歴史の中で最も長い一系の君主であると自慢するが、その天皇による統治は稀だったことについては指摘したがらない。また、その君主は、ほとんどの期間を統治していた軍閥によって拘束されていたということも認めようとしない。1867年に軍事独裁が倒されが、この革命によって、これまで根付いていたやり方が変わることはなかった。単に、それまでの一連の軍事独裁者が新たな独裁者に変わったに過ぎず、この新たな体制では前体制よりも皇位の背後の有利な立場で国を治めることになったのである。

天皇がこの新たな体制を喜んでいるかは分からない。天皇は政府報道官以上に、このことについて答えることはないからである。しかし、天皇は軍の友人を皇位からは遠ざけたかったことを示す気配はあった。この天皇裕仁の祖父は、軍国主義者から、当時統治していた独裁者を転覆後の、独裁者の東京の城を新たな住居としてもらったが、天皇特権が軍国主義者に剥奪されない新たな体制ができることを願っていた。この考えは、この天皇が公布した憲法を見ると明らかである。憲法では、彼の宮廷の友人である貴族と新興財閥の政治力が強化され、結集すれば、十分に軍国主義者を抑制することが出来るようになった。

しかし、軍国主義者はそのような仕組みに巻き込まれることはなかった。彼らは天皇を直属の指揮官にすることによって、自分自身を守った。したがって、日本の陸海軍は政府や人民に対して、責任を負うことはなく、彼らの義務は天皇に忠誠を尽くすことのみであった。つまり、陸海軍は自己以外に対しては責任を負う必要がなかった。天皇は年に 1 回、物々しく警戒されている皇居を出て、最高司令官の制服を着て、陸軍野戦地区で部下の活動を見るか、時には、横須賀か横浜に行って巨大艦船に乗ることが許されていたが、部下と陸海軍の今後の方針について多くの話をしたわけではなかった。これは、天皇には最高指揮権があったが、

これはあくまでも憲法上のものであり、融通の利かない臣民以外は、憲法をあまり真剣に理解しようとしていなかったからである。

不可解な網が革命期の時期に作られたていた。日本では、この革命で民主主義ではなく、恐怖と軍国主義による新たな集権組織がやって来て、この集権組織はアジア大陸にあふれ出し、全太平洋地域に爆発的に拡大した。日本人は不格好な体を美しい着物で覆って、隠している。同様に、彼らは醜い反乱を神格化された天皇の礼服で覆い、隠そうとしていた。何がこの礼服で隠されていたかを知るのは難しくはない。

1867 年に軍事独裁者である徳川慶喜を倒した反逆者は封建制で「外様」と呼ばれる藩に属していた。「外様」とは徳川が勝利した時に、徳川側についていなかった藩のことを言う。彼らは軍事独裁者（日本では将軍家と呼ばれる）が、統治した 267 年間、圧政による恩恵を不法に維持していると感じていた。他国の反逆者と同様、彼らにはお金と優れた宣伝活動が必要だった。この頃、日本ではどこへ行けばお金を得るかは知られており、不満を抱いていた軍閥も知っていた。彼らの中で最も主導者は薩摩藩と長州藩だった。彼らは新興商人に近づいた。この商人達は新兵器によって、刀を使用している侍を倒す方法を学んでいた。これらの商人は兵器を国に売ったが、国が不払いになることはまずなく、国の莫大な富を獲得することになった。これらの商人の一つが三井で、現在の日本での最大な資本家になっている。

これらの商人は社会的には領地を奪われた落ちぶれた侍や軍閥より下の階級であることに不満があった。彼らは、商売と社会的地位のために、新たな機会を創出する企てを喜んで支えた。彼らは将軍に対して特別な関心はなく、彼らの関心は自分の拡大する財布に向くようになっていった。

反逆者にとって最後に必要なのは宣伝活動だったが、この活動は準備されていた。彼らが閃いたのは拘束されていた天皇についてだった。当時の天皇である孝明天皇は、京都御所で孤独な生活を送っており、将軍の許可がなければ京都御所から出ることができなかった。将軍が軍事独裁として国を治めているのは、彼が天皇の代理だからであり、将軍にとって天皇は最も重要だった。孝明には三井達の全財力よりも、重要な価値があり、将軍が孝明天皇を守り、「外様」との接触を防ぐのは自然なことだった。日本の皇位をうまく取り扱うことの重要な原理をここに見ることができるかもしれない。それは天皇を自分側に置き、敵側を排除するということである。いったんこの原理が無視されれば、ほぼ確実に皇位の持ち主が変わるのである。

「外様」達にとって、天皇に彼らの広告を指揮してもらうことに価値があることは明らかであり、彼らは天皇も喜んでやってくれるに違いないと思っていた。京都では天皇を楽しませる多くに女官がいて、食事も悪くはなかったが、男性で、現人神でもある彼のやることは食事と睡眠だけだっただろうか。孝明天皇には、やりたいことは他にもあったし、そのことは外様にも分かっていた。しかし、問題なのは将軍に捕らえられずに、どうやって孝明天皇と

接触するかということだったが、それは宮家が着ている着物の長い無地の袖に手紙を入れることで行われ、この連絡経路の確立は、80 年後の東京での外国人特派員が検閲を避けることに比べて明らかに容易だった。

そして事態が開始した。それまで従順で、女官以外とは決して喋ることのなかった孝明天皇が、突然、将軍に対して横柄になった。彼は政治運営について招かれざる提案を出すようになり、大胆にも、将軍に対する初めての反対運動の大宣伝となった。これは「勅令」と呼ばれ、将軍が天皇に尋ねることなく、米国、英国等との貿易条約を締結したことに対して激しく非難した。ちなみに、これらの日本と外国で行われた開国の条約は将軍によってなされたものであって、時々、日本人が外国人に信じ込まそうとしているが、革命後に天皇によってなされたものではない。

天皇が江戸（現在の東京）での政治運営に満足していないという意見が、初めて人々に公表されたことに将軍は激しく動揺した。また、拘束されている天皇に人々が結集しつつあることも動揺した原因だったであろう。重大な出来事がやって来るとの噂が国を広まっていた。将軍は孝明を和らげるために京都に使者を送り、これまでの過ちを謝罪し、過去を水に流すことを願っていることを伝えようとした。同時に、この軍事独裁者は大老に天皇から賢い宣伝文句を引き出した者の検挙と謹慎処分を行わせた。二つ目の意見が発表される可能性も十分にあり、彼はこれを恐れていたからである。大老は日本における「新体制」を試みている人々を妨害する者に報酬を与えることにしたが、この大老は江戸の将軍の御殿の門で即時に暗殺された（**桜田門外の変）。これは、天皇から任命されている将軍とその側近が、軍国主義者の激動に乗り遅れると殺されることを示す素晴らしい見せしめとなった。

大老の暗殺によって、将軍は初めて状況が深刻であることを知った。外様達が江戸の将軍に接近してきており、あえて将軍の門を叩くこともあった。将軍は彼らが門を破り、入ってくるのは時間の問題であることを知った。では、彼の命を保証することができる人は適切な場所（**京都御所）にいるのだろうか。こうして、将軍は素晴らしい駆け引きを考えた。彼は孝明に一緒に同等のパートナーとして日本の独裁政治を行うよう頼んだ。つまり、彼は孝明に将軍の広告の長になってもらい、その業務を厳重に警備し、不満な外部の戦士から彼らが持っている最も強力な武器を奪い取ろうとしたのである。しかし、この企みは達成できなかった。外様藩は既に京都に入り、天皇を管理下に置いていた。今や将軍は外になり、外様が内になったのである。そして内で維持された。

順調に京都へ入り、天皇を引き継ぐことが出来た外様の最後の仕事は江戸の幕府に討ち入りし、軍事独裁者を倒すことだった。このために彼らは、次に、将軍に反対する大衆を扇動することにした。そのためには、そのきっかけが必要だった。大衆に「軍国主義者、商人、ミカド（天皇）の三位一体が我々の力を行使するために、将軍を追放したい」とありのままに言うわけにはいかないだろう。そこで彼らは将軍を（徳川家が治めてきた 267 年が過ぎ

てから)、天照大神からもらった無限の力を持つ天皇の力を奪っていると責めた。天照大神は日本で初めて天皇を身ごもったことで、あがめられている女性だ。孝明から先祖からの権利を奪った将軍は神聖な帝国を冒涜したことになる。つまり、反逆者は将軍であって、将軍に反逆している外様ではなくなった。こうして、プロパガンダが始まった。まずは天皇へ先祖からの力を「奉還」する運動から始まった。先祖からの力は単なるフィクションであり、実際には存在しない。天皇は常に、日本の歴史の初期から軍事独裁者の傀儡だったからである。

運動に精神を注入し、外様は将軍を失墜させようと、外様達は外国排斥キャンペーンを打ち上げて、1853 年に黒船がやって着て、ペリー提督からの開国要求を将軍が受け入れ、開国したことを非難した。外国人には貪欲な意図と凶兆があることを大衆に証明するために、外様の長州藩は商船に火をつけて、故意に米国、オランダ、フランスを挑発し、砲弾を放った。そして、薩摩藩は英国の艦船を攻撃した。彼らはこれに対して報復を受けることを知っていた。次の年の 1864 年にその報復が起きた。下関が上の四つの国の艦船から砲撃を受けた。これは日本と民主主義国家間での初めての海戦であった。五百万ドルとの厳しい賠償額が請求された。同じ長州と薩摩の子孫らはそれから 80 年も経たずに、フランス領インドシナを占領した後に、真珠湾、英国領シンガポール、オランダ領東インドへの攻撃を行っている。

下関砲撃（**日本名；下関戦争）によって将軍は面目を失い、致命的となった。外国と初めて対応したのは将軍であったため、将軍が攻撃の責任を負うことになった。それから三年後に三位一体はとどめを刺す準備を進めた。孝明天皇は亡くなったが、軍国主義者にはまだ、江戸への行進のために天皇の垂れ幕が必要だった。そこでこの蜂起の役割を孝明の代わりに、その子供の明治天皇がやることになった。すべてが、法の下で行われていることを示すために、軍国主義者はこの若い天皇に、国の統治者として、彼らに江戸幕府への蜂起の開始を命令するように頼んだ。この少年は言われた通り 1867 年 10 月 14 日に、その命令を下した。将軍は反逆者によって裏をかかれ、数の上でも劣っており、終わりであることを悟った。日本史によると、この攻撃が行われる日に、将軍は少年の天皇に将軍家が持っていた力を明け渡すことを「承認 permission」するように頼み、これが「許諾 granted」された。日本では天皇派（loyalist）と呼ばれる反逆者が勝利した。これが 1867 年の輝かしい「明治維新 Meiji Restoration （大政奉還)」である。少年の天皇は京都から東京に転居し、追放された将軍の城に新たな住居をもらい、尊敬される神として作られた。

この小さな歴史的ドラマのなかで、いくつかの出来事がある。最初の主人公は商人と軍国主義者である。この二つのグループが団結することによって、戦いで勝利するために必要な財力、資材、武器、そして軍隊が供給されるようになった。革命の炎の中で作られたこの団結は、引き続き、経済力と軍事力の基礎となり、内戦で勝利した後は海外の外国領地の征服へと向けられた。良くも悪くも、金持ち達は軍国主義者の娘と結婚した。彼らは軍国主義者を支援し、軍国主義者は金持ちに千倍の恩返しをした。それは、最新の武器を作り、領地を獲

得し、それまで夢でも見たことがないほどのお金を手に入れることが可能になったのである。概して、結婚ではしばしば暴動が起こったが満足なものだった。暴動は最良な家族内で起こる。

この団結とその未来の事業への恩恵を得るために、天皇が呼ばれた。天皇はこの日までは軍国主義者、財閥と共に三位一体の一つである、神聖のゴーストであった。それは、天皇の力は、新たな住居に落ち着いて、統治権が「復古」されるまでは、消失（ゴースト）していたからである。天皇は神となり、人々から崇拝されることによって、神聖となる。天皇は神道と呼ばれる日本の国教の大祭司でもあった。彼は、日本での生きているエホバであり、民衆が関心を持っている限り、彼の言葉は絶対である。名目上の統治者として、天皇は軍国主義者と財閥に世界で最も圧政的な独裁政権を行わせることができる。天照大神によって天から伝えられた鏡、宝石、刀の三つの三種の神器を所持している現人神である天皇は聖的な恩恵と、魔法にかけられた民衆の黙諾を、この二つのグループによって行われる日本と外国との戦争のために確保した。このように、明治天皇は革命に加えて、二つの戦争を神聖化し、彼の子供の大正天皇は第一大戦と多数のアジア大陸への侵略を、孫の現在の統治者である裕仁はさらに三つの戦争を神聖化したが、その最後の戦争では邪悪な三位一体を破壊することになるかもしれない。おそらくこれが、彼の神聖な洞察力から、彼の元号を「昭和」と名付けた理由かもしれない。昭和とは平和を啓発するという意味である。

即位によって天皇に与えられた三種の神器のうち、鏡は真実、宝物は幸運、剣は正義の象徴だと日本では言われているが、鏡は太陽光に反射しており、天皇の象徴、宝石は財閥の象徴、剣は軍国主義者の象徴にした方が適切かもしれない。

裕仁は日本で最も人気で最も孤独だった。これは、約七千二百万人の人々が彼を敬っているが、彼の友人にはなれないからである。裕仁ほどの英雄でありながら、人気と孤独の両方を持つ者はおそらく、どこにもいないだろう。臣民は彼を崇拝しなければならないが、彼を名前で呼ぶことすら出来ない。国民は彼のことを「天皇」と呼び、彼は国民を「臣民」と呼ぶ。このような呼び方では、あまり友情は生まれない。しかし、おそらく、友情が生まれれば神聖が軽視されることになる可能性があると考え、軍国主義者、財閥、そして、宮廷の出来事を扱う貴族はこのままにしたのであろう。

臣民は頭を下げることが許されているが、天皇に対して頭を下げる時は極めて重要である。これは国礼とされ、同じようなものは世界にもない。日本人はこれを「唯一無二」と言う。この頭を下げる行為は臣民の神聖な統治者への服従の象徴である。７千２百万人の日本人が天皇に向かって、多くは毎日、頭を下げているが、これが意味しているのは、７千２百万人の日本人が自分の命を天皇に捧げ、その命を天皇が好きなようにするということである。ヒトラーとムッソリーニは裕仁に対して強烈な嫉妬を感じるに違いない。彼らは叫び、旗を振っても全員一致の服従を得たことはないが、裕仁は何もせずに、確実に手に入れることが

できた。

どのようにして一人の人間に対して、これほど多くの人々が、背中が折れるほど頭を下げ、命を捧げたのかを理解するためには、日本における貧困・無知・習慣・制圧の役割について考える必要がある。これらは封建時代と前封建時代から受け継がれており、社会的基盤をもたらし、辺鄙で、孤立した農業国から世界でも主要な工業大国の一員へと、驚くほどの発展が起こった。この工業大国の使命は最新の武器を用い、外国領土と外国の民族を征服することであった。

もし、日本にやってきた外国人が、カラフルな着物と、周りを見ている可愛くて人形のように顔に圧倒されず、運良く、官営親善の付添えを避けることができれば、日の昇る国の風景の中に濁った灰色の物体を見て驚くことになる。その物体が何なのかはすぐに分かる。私は合衆国から日本にやって来てすぐに、バイクに乗って、横浜から東京へ行こうとしたことを覚えている。その頃は、ガソリンは戦争専用になっており、使用する事は出来なかったが、タクシーを使うことはできた。出発してから首都までの 20 マイル間に港町があり、小さく、くすんだ色で、汚れた、狭苦しそうな木と紙で出来た構造物があった。英語では「掘っ立て小屋」と呼んでも良いが、それよりは粗末だ。ここで神の崇拝者が生まれ、現代版の侍へと成長していくのだ。これらの家で赤ん坊が歩けるようになる前に、自分の魂を神聖なる天皇に差し上げるように教えられているのだ。

日本での現場に私は個人的に衝撃を受けた。アメリカの学校の先生からの話では準備が少なかったからである。先生から教えられていたのは、日本人は清潔で家の中には靴を脱いで入り、我々のように、ハンカチで鼻を拭くことも、そのハンカチをポケットに戻すこともない。繊細な日本人は紙の衛生的なナプキンで鼻を拭き、それを全ての街角にある容器に捨てているからという説明だった。もし、この先生が日本に来ていれば、その理由が分かるだろう。日本で靴を脱ぐのは、日本人のほとんどが、一世帯の人数は少なくとも 5 人、多くは 8 人以上で、皆が一つの狭い部屋の床で食事をし、眠り、遊んでいるからである。鼻から長い黄色い鼻水を垂れて、拭こうとはしない日本の子供を見るだろう。それは、鼻を拭くのは健康に悪いことだと信じられているからである。

外国人が横浜に初めてやって来て、東京の中心部に移動するのは、窮地を通り抜けて解放されるようなものだ。東京では、それまで見てきた掘っ立て小屋の世界とは完全に異なった文明を見ることが出来る。それは、みすぼらしい木と紙でできている国の真ん中に、西洋の街を丸ごと持って来て置いたようなものだ。そこには八階建ての丸の内ビルディングがある。道の反対側には時代遅れではあるが、いまだにヨーロッパ風の赤ブロックの駅、モダンな中央郵便局と日本郵船の本社である郵船ビルディングがある。九百万ドルの税金で作られた白い花崗岩の国会議事堂は 1936 年に建設され、同年に陸軍によって閉鎖されたこともあったが、その建物は目立ち、税金を払った人々の家と比べるとさらにいっそう突出している。

しかし東京の中心部は東京全体とは異なっており、当然、日本全体とも異なる。東京のほとんどは木と紙から出来ている箱であり、私が横浜からの途中で見たものと同じである。日本のほとんどが同様である。東京の中心部の面積は東京全体に比べて非常に狭く、そこに大きなビル、大きなビジネス、大きな政府機関、そして、多くの外国人がいる。ほとんどの日本人、つまり、首都には住んでいない日本人は、彼らにとって東京は「外国」である。日本の田舎者が初めて東京にやって来たときの戸惑いと驚いた顔を、私は忘れない。彼は周囲の石材、コンクリート、セメント、ガラスから作られている現代の構造物を見て驚き、同じように唖然とした子供を手で握り、反対の手で指さして、日本語で私に「あれが本当の丸ビル？」（コンクリートで出来ている丸ノ内ビルディング）と聞いてきた。私がそうだと言うと、彼は頭を上にあげてその八階建ての建物を注視しながら周囲を歩いていた。日本におけるこのサイズの建物への評判は、アメリカでのエンパイア・ステート・ビルへの評判と同じである。この日本の「摩天楼」はアメリカでは最も田舎の少年が見ても、何も感じないだろう。彼は驚き、圧倒されて外国人と喋ったことすら気づいていなかった。

東京と日本のそれ以外との違いは世界と日本との違いと同じである。東京は西洋の産業と軍事機器の中枢である。日本のそれ以外の場所では、数少ない産業都市を除けば、木と紙の家の中で、西洋の機械を手作業で動かして提供している。家の中では、先祖から殆ど変わることなく、同じ性格、同じ盲目な従順と儒教の孝行の教え、同じ疑う余地のない天皇への崇敬と同じ何百年前の封建時代からの神道の神々を見ることが出来る。機械によって、東京、横浜、神戸、大阪、名古屋の外観は変わったが、他の地域での外観は変わらず、封建精神も変わることがなく、この精神によって日本の近代的工場、近代的な軍艦、近代的の機関銃が使われている。

日本と他国との違い、そして、日本が西洋産業国に追いつき戦争機器を得た理由は、日本が封建時代からの絹と封建的な労働を、現在、外国人が見つけた機械についての頭脳と工業的な才能と交換することが出来たことである。日本は産業革命を輸入したが、この革命に付随した思考と標準的な生活の輸入は閉鎖した。その代わりに、この国の統治者は国民が木と紙の家に住み続け、木と紙の環境の中で今まで通りの米、魚と漬物を食べ、木と紙の思考を持ち、中国での戦場から、木と紙の箱の中に戻って来ることをと望んでいた。

国民は気にはせず、特別な不満もなかった。外国人と国民以外は彼らの貧困、無知、習慣と抑圧について知っていた。日本人はこれらを元来の物事として受け入れていた。彼らは、彼らが毎日祈っている尊敬される先祖達と同じように暮らし続けている。数世紀を経て、封建制度の生活が彼らの心に根付いており、今でも天皇、祖先、神様、食事、地震を当然のように受け入れている。これが、彼らが独裁政権下で生きていることに気が付いていない理由である。彼らに関する限り、彼らは神聖な天皇によって統治されており、彼が在位していることを知っている限り、（在位であることは、4 ページの新聞の写真と、公式に時々、天皇が登場することによって証明している、）全てが当然のことであり、彼らの神様と先祖の世界

はすべて正しいと感じている。そして、彼らは正しいこととして国礼で頭を下げている。

皇居の前の広い砂利の広場は日本のメッサである。大日本帝国の至る所で、臣民は、いつかはここを訪れ、天皇に最も近い場所から「崇敬を表す」ことを夢見ている。この広場は単純で非常に広い道路が皇居の主門に向かってゆっくりと上っており、二重橋で車道とは分かれている。

一年中毎日、朝早くから夕暮れまで、子供から大人まで様々な日本人がやって来て、砂利道を足を引きずるようにゆっくりと歩き、ある場所までやってくると、彼らの魂を彼らの神に差し上げるために、突然止まっているのが見られる。次に、厳粛に敬意を示すために深く頭を下げ、それから皇居広場のもう一つの側に進み、同じ動作を行っている。これだけでは、彼らにとっては不十分である。彼らは皇居の玄関口にある、金の十六の花弁のある皇室の菊がある大きな木製の扉をじっと見る。この扉は二人の鞘から抜いた銃剣を持った、高慢そうな皇室護衛によって守られている。同じように、裕仁の皇室の先祖が京都で護衛されていたに違いない。彼らは三つの電球の房を眺めているが、これは、この封建的な場面に貢献された唯一の西洋文化である。彼らは最後に傾斜した巨大な石垣を軽く見る。この石垣の先には多くの切妻造の白い中世の衛兵所があるが、これは、元々、奥に住んでいた将軍を守るために作られたものである。そして最後に振り向いて広場の入り口の方に戻って行くが、殆どの人が再度、振り向いて天皇に向かって最敬礼の形で頭を下げている。こうすることで、観光で来たのではなく、心から厳粛な気持ちで来ていることを天皇に示したいのである。

天皇誕生日、新年、征服による新たな領土獲得の祝賀会などの特別な時には巨大な群集が皇居広場に群がり、大混雑になる。ここでは統治者への多様な臣民を見ることができる。将来の戦争にための器具と工場機械をつくることになる制服を着て、学校カバンを背中に負って、手には旭日旗を持つ少年。帝国の征服者と穏健派の政治家の殺人者となる兵士と水兵のペアや大集団。殺人に関与し、「適切な考え方」の育成を手伝う国粋主義者（ナショナリスト、nationalist）のギャングになる、会員で分かるように帯を胸に斜めに掛けたり、ペナントを持っている愛国協会の会員。軍人と水兵が罪を犯すことを祝福する神々の保護者となる、中世の太鼓を持ち、切望と狂信的な顔をした宮司。

「天皇陛下のために万歳三唱！」何人かの愛国者や軍人は泣き叫びながら、全員が一致して、手を空に向かって素早く伸ばしながら、「万歳！」を叫び、これを三回行う。「万歳」の意味は全てを可能にする神に対して一万年あるいは長い間の長寿を願うということだ。もし、陸軍による征服が十分に広範囲で、十分に血まみれだったら、神である裕仁は彼の白馬をまたがって橋までやって来て、じかに陸軍の行為を是認するかもしれない。万歳の喝采は激しく盛り上がり、皇居周囲の中世の堀の緑の水は振動する。

裕仁が通常の人間と同じように誕生したという事実は秘密にはなっていない。「日本の本州の最西の九州にあるごつごつした峰に天照大神が孫を不時着で降ろし、天皇の先祖は同じ

ように天から転がり出てきたと思われているのに」と訴える日本人はいない。裕仁はふつう見られる目の病気があり、メガネが必要で、他の多くの人を診てきた眼科医に診てもらっている。

また、裕仁は裕福な臣民と同じように、スポーツと趣味で楽しんでいたことも知られていた。彼はしばしば、台湾の初代台湾総督の息子でアメリカに留学した樺山愛輔伯爵などの仲の良い華族とテニスをしたり、皇居のトラックの周りを乗馬したり、葉山にある皇室のビーチから離れてところで太平洋の泡立ちのある水の中を一人で泳いでみたりしていた。また、葉山では夏の別荘があり、そこにある彼の実験室で海洋生物学の実験であれこれいじっていた。これが彼の道楽であった。

しかし、天皇が臣民を含め、他の人間と同じように、食事をし、眠り、運動をし、一般的な働きを行っているという事実について日本人と議論しようとしても意味がなかった。裕仁の父で、精神疾患で亡くなった大正天皇は、明治天皇と彼の愛人の柳原の間で生まれた非摘出子であったが問題にはならなかった。日本では妻が後継者の男子を産むことが出来なければ、愛人に産ませることはおかしなことではなかった。ただし、皇室の初期には 5 人から多くて 9 人の妻に加えて、たくさんの愛人を維持するという明らかに慣習を悪用する天皇も何人かいた。裕仁は明治天皇の行為を神聖化し、柳澤婦人を「皇位継承に奉仕」したとして、公式に彼女に実祖母との名誉を与え、これが日本で報道されている。

日本の天皇系は、世界で最も長く、「有史以前」からの一系の子孫であるのは本当かどうかも問題ではい。日本人はいくつかの奇妙な出来事があったことを認めている。天照大神は女性であり、歴史の中ではたくさんの女性天皇がいたが、その一人の孝謙天皇が僧を宮廷に呼んで二人で住むようになったが、その後、皇位強奪に失敗したという、スキャンダルが起こってからは、女性天皇は少なくなっていることも知られている。昔の宮廷でのスキャンダルの本を読むことを楽しみ、秘密の感覚を得ている日本人もいる。問題なのは、日本人は、子供の頃から常にドグマを叩き込まれ、成長すると陸軍や海軍の兵士になり、喜んで人を殺し、侘しく死に、41 歳で口髭、メガネをかけた男は、東京の中心部の 531 エーカーを石垣で覆ってその背後に住み、神と呼ばれていることである。

日本で頭を下げるのは貧しい小作人、働き過ぎの労働者や 20 世紀の侍だけではない。軍国主義者と財閥も頭を下げる。軍国主義者は戦いの神である、八幡に頭を下げる。財閥は、以前は徴兵からの解除のために、国会と裁判所に頭を下げたが、今は軍国主義者に頭を下げている。彼らの心からの崇拝によって、八幡は軍国主義者に微笑んで、大きな戦争一つと、新たにさらに大きな戦争を与えた。軍国主義者は喜んだ。彼らは八幡のランクを国の主たる神に上げ、天皇までもが頭を下げることを保証した。日本の主な町で最も大きい構造物は八幡神社である。八幡神社のほとんどは昔の静かな林の中に建てられ、そこで、戦争について平和的に瞑想することが出来る。周りにいるハトの群れが平和を強調している。日本の軍人の

ほとんどが田舎出身であるが、田舎の子供にとって、八幡と言えば遊び場を意味しており、八幡は遊び場としても重要である。子供達は「無邪気に遊ぶ楽しい時間の多く」を八幡神社の日陰で過ごしていることを指摘して、この関連を説明した日本人がいる。しかし、残念ながら、この子供達の多くは残りの時間は、東京の靖国に安置され、靖国が八幡の崇拝者の魂のための東京の家になっていることについて付け加えることはなかった。

軍国主義者の八幡への感謝は戦争と遊び場についてだけではない。彼らは昔ながらのチャンバラに感謝している。遊び場から八幡と裕仁のための戦争で戦うために集められた子供達への資金と物資の要求に対する反対には軍国主義者が、このチャンバラで切り落とすことができた。彼らは音楽理論を実践している。それは予算が増えれば、戦争も拡大し、戦争が拡大すれば予算も増えるという理論である。憲法は明治天皇から天皇の親切心によって民衆に「与えられ」、後に、軍国主義者から帝国の神々への尊敬によって、価値が損なわれることになったが、軍国主義者は政治とそれを通じて国内と外交政策への支配に干渉がない限り、憲法に反対することはなかった。軍国主義者は憲法の発布に同意し、国会が設立された。国家の軍事力、政治力、経済力の権力闘争が行われる中央集権で、軍事は大きく後れを取った。軍国主義者は何百の小さな陸軍が分裂し、封建世代の氏族に統合するのではなく、各地の軍力が一つに集まり、巨大な勢力を持つことを構想していた。諸外国との交渉で経済力が拡大していることで、軍国主義者は巨大な軍備力と、現代の無敵艦隊を作ることの意味を知った。

将軍の転覆と中央政権樹立後、二つの独裁グループが、その管理を分割し、正式協定を行った証拠はない。しかし、明らかなのは、その後、軍国主義者は政府を動かすために陸軍と海軍の他に、もう一つの重要な事業があることを理解したということだ。それは、新たに外国対応の政府報道官を作ることだった。その一方で、財閥は白人の「野蛮人」と接触して、風と波に逆行して進み、自然の活火山のように煙と轟音を出し、破壊する活火山を載せた未知な黒船の製造についての秘密情報を抜き出していた。もちろん、政府は金銭的に財閥を支え、野蛮人が考案した謎めいた船や未知な装置を日本で製造するための工場を設立させた。同時に、日本製品の製造と輸出を運営し、それによって得た資金で、日本のごく一部の地域を独占的に外国の魔法に特化した工業地域に変換するために必要な熟練者への支払いと必要な機械と材料に投資した。こうして、東京、横浜、神戸、大阪などの都市に、「外国」地帯が生まれた。

しかし、これらが発展している一方で、財閥と彼らの機械を動かす人々に未知な考えが生まれ始めた。彼らは憲法と政府に対して、これまでとは全く異なる解釈を持つようになった様子だった。どうも彼らは、憲法とは、軍国主義者からのある程度の防御、日本で使われている技術や機械を生み出した国々に見られるような、ある程度の人間の自由、そして、自由が保護され、外国の支援者との交渉への規制が満足できるように、ある程度の政府を管理する権利を彼らのために保証するものだと感じたらしいのである。言い換えれば、民主主義と自

由の思想が、こっそりと海外からの機械と謎めいた理論に付随して、封建思想の国に入り込んできたのだ。実業家もこれらの考えに共感し、委託されて新兵器を製造した彼らにも、新兵器の使用を決定しようとする政府に意見する権利を与えるべきだと感じるようになった。

公平な立場から財閥と共感したのが貴族であった。貴族は日本の歴史に熟知しており、財閥と貴族と天皇が、以前、何百年もあったように、軍国独裁者によって拘束される危険性を理解していた。貴族は、一部は宮廷にもおり、財閥と提携して国会で軍国主義者を抑制することを望んでいた。増大している政府の日常業務を行うために設置されたキャリア官僚もまた、政府を管理するための手段を探していた。しかし、政治的、経済的な幅広い観点から見ると、官僚と貴族の重要性は、彼らが実権を持っている軍部と財閥によって、大きく支配されている事実を考えると誇張されているのかもしれない。

軍国主義者は明治「維新」の直後から、「危険な思想」が西洋からやって来る商品と共に、横浜、神戸、長崎港から入り込んでおり、難しく、恐らく予期せぬ問題が生じていることを認識していた。伊藤公爵（伊藤博文）を代表として、プロイセン王国（**現ドイツの一部）から持ち帰った憲法に「異なった考え」があるかもしれないことがすぐに分かった。日本の現代史のほとんどは、軍部がこの「異なった考え」を如何に解決したかの物語である。軍国主義者は彼らの代表に政府を動かせて、初めて、直接支配することとなった。その代表としては陸軍を支配している長州藩出身の伊藤博文や、海軍を支配している薩摩藩出身の松方公爵（松方正義）がいる。軍国主義者は彼らの中から総理大臣を任命し、政党を合併させて乗っ取り、最終的に、選挙担当を持つ官僚の仕事を崩壊して選挙結果を操作するようになった。官僚のほとんどはもともと藩の武士であり、上司の軍国主義者への奉仕は現在も続いている。軍国主義者は政府を直接操作しながら、中国とロシアと戦争をして勝利したことで、日本の軍事力は世界主要なレベルにまで強化された。

この時、つまり、1905 年に、日本の行方は決まった。ロシア戦争後、陸軍と海軍は必要な兵器を作る時間と資金があれば、他の西洋の軍事力も打倒できるに違いないという確信が芽生えた。軍国主義者は政党政府の編成を認めたが、必要ならこの政府を解散させる覚悟があった。解散させた方法としては、（一）内閣から陸軍、海軍の大臣辞任による内閣の破綻、（二）多数の暗殺で見られるように、軍力の直接行使、（三）1931 年と 1937 年で見られたように中国への戦争勃発があった。官僚と皇位を統制し、これに謀殺とテロを加えることによって、自由主義や金持ちの仲間へと迷い込んだ政党や同僚の軍人を撲滅することが可能になった。こうして、彼らは憲法の「異なった考え」を実質的に転覆することによって取り除いた。

軍国主義者は誰なのか？陸軍、海軍、そしてそれらを通じて政府を動かしている人の周りには多くの謎がある。戦争実行者を全て確定することは不可能であるが、多くの人物は挙げられる。軍国主義者はもちろん、陸軍、海軍の二等兵ではない。彼らは通常、頑固者で純真な

小作人の若者で、生きていく最大の目的は戦場で現人神の天皇のために死ぬことだと教育されていた。軍国主義者もまた、頑固で純真で、名誉な戦士の覚悟があった。しかし、彼らの祖先は武士であり、海軍、陸軍の学校を卒業し、階級は上がり、重要な立場で、皇位と政府を統制する貴族、政治家と官僚を動かす。一般的には、彼らは力を行使することを好み、その成果を見せるのは他人に任せることが多い。

陸軍と海軍で「実際に」日本を動かしたのは誰なのかについては、多くの憶測があるが、おそらくその人数は過剰である。これは、重要な決定を実行する謎めいた力が存在し、表には決して出てこないことを暗示する。この謎の一部は、日本人の心の奥にのみ存在し、表情に出そうとはしないためであり、残りは軍国主義のヒエラルキーにおいて、陸軍と海軍間で行われた様々な派閥争いが秘密下で行われていることによる。この派閥争いは、明治維新後に陸軍と海軍が中央集権化される以前の、封建時代の藩の間で起こった戦いの現代版である。以前の戦いは暴力によって決定されていたが、新たな戦いでは、国内の政治的な計略、陰謀、自国と戦場における軍事的成果と業績によって決定されている。

もう一つの、この以前と新たな戦いの違いは、現在の藩の構成が以前とは異なっていることから生じている。封建制度での藩は先祖代々の世襲によって支配されていた。現在版の侍にも家族の絆は強いが、以前のように、長州藩ならば陸軍、薩摩藩ならば海軍とは言い切れなくなっている。今の藩は軍隊の学校や後の戦場での将官との繋がりが基盤になっている。将官が学校での友人を自分と同じ部隊に呼ぶことはよく知られている。陸軍や海軍の、ある将官の昇進が報道され、顕彰されると、同じ学校の同僚も同じように顕彰されることが多い。飯田祥二郎中将が日本軍隊の最高司令官に任命され、インドシナへの新たな命令が下された時、彼の士官学校の同級生のうち、木村中将が後に陸軍次官になり、吉本中将と下村中将の二人にも影響を与えたことが指摘されている。この三人の同級生は飯田が南方に旭日旗を立てに行く名誉を与えられたことに、強い関係があったのではないかと考えられている。その後、タイとビルマへの侵略を主導したのが飯田である。私が、「軍隊統制において、何が軍を動かしているのか？」と陸海軍の日本人関係者にと質問した時に、それは、陸海軍の学校の全卒業生からの「全方向からの圧力と下からの突き上げ」の結果であると教えてくれた。

天皇の力は軍国主義者によって侵害されており、天皇とは異なり、軍国主義者は神権によってではなく、戦争で勝利する能力と権力グループのメンバーからの支持が維持されているかによって決められる。もし、いずれかで失敗すると、軍国主義者はすぐに変わり、脱落する将官の割合は高い。彼らの任期は決まっておらず、自分の権力を維持するために誰かにお願いしようとする者はいない。下からの突き上げによって、彼らの立場は常に流動性で、日本での最高位である彼らの立場を切望している兵士が定期的に増大している構造になっている。軍国主義者は天皇や一般皇民よりも、自分自身で全てを決定している意味で重要である。報酬は高く、競争は厳しい。この陸海軍の階層の流動性で常に変わっていく性質は陸海

軍が強くなる理由の一つである。役に立たない人はすぐに除外され、自然に、最高の頭脳が現れて、トップに立つ。

厳しい競争があることで日本には唯一の軍事独裁者が存在しないことを説明することができる。日本のスケールでも、シーザーもナポレオンもいないのである。奇妙なことに、軍国主義者は誰か一人を軍事独裁者として認めようとしないためである。軍国主義者は権力への貪食があまりにも強く、一人の将官を代表にして、彼の手中に任せることが出来ない。将官の競争は軍隊内だけではなく、軍隊間にもある。

軍隊内での権力の闘争と、権力が一人の将官に行くことなく闘争を保持したい願望によって、陸軍と海軍の内部での統制は分かれている。表面的には他の国で見られるものと似ているが、実際には日本の方が強い。主要な民主主義国家や全体主義の独裁国家では、全軍部の上に最高司令官があるが、日本には無い。理論的には、天皇がこの権力（**最高統帥権）を持っているが、それは憲法上のものであり、また、陸軍、海軍の内部にもない。日本の軍は自律的で、個々の独立した軍のグループが協力している。陸軍は海軍のルールを従うことはなく、逆も同じである。最高司令官は陸軍と海軍よりも上にも、陸軍と海軍それぞれの中にも無い。日本ではそれぞれの軍の最高司令官の役割を三つに分割している。陸軍は参謀総長、教育総監と陸軍大臣、海軍は軍令総長、naval education と海軍大臣。（**実際には陸軍は陸軍大臣・参謀総長・教育総監の三つ、海軍は海軍大臣・軍令部総長の二つであり、naval education はない。）それぞれが自分の部のトップ以上の存在であり、それぞれが陸軍、海軍の最高司令官の三分の一の立場を持っている。日本人にとって、天皇制についてと同様、軍の組織についても「森羅万象唯一無二」だと言うかもしれない。

ミカド（天皇）、軍国主義者、財閥の包括的な三位一体の中に陸軍、海軍それぞれに三党制（**三人指導体制：共和政ローマ末期に現れた政治体制で、共和政から帝政に移行する間に生じた 3 人の実力者による寡頭政治体制。ここでは、日本における陸軍の陸軍大臣・参謀総長・教育総監と海軍の軍令総長・海軍大臣になぞらえている）があり、この三党制の中に日本の軍事独裁者の居場所がある。ミカド（天皇）は異教徒の降霊術者で、皇民の判断力を奪い取り、陸軍、海軍の三党制は皇民から世俗的な事のうち、経済以外のほとんど全ての局面を支配し、皇民の経済については財閥に任せた。したがって、経済は俗事上の権力の二次的な役割を果たし、しばしば軍国主義者によって翻弄されている。

陸軍、海軍内の争いの詳細は公的には出てこないが、結果が出ている。これらによって、日本国家の行為の主な責任者を挙げることが出来る。そして彼らは睡眠術にかけられた 7 千 2 百万人の皇民を死闘に放り込もうとした直接的な責任者である。皇民の死闘によって世界の約半分に火を付けることになる。彼らの名前は分かっており、以下が主な独裁者である。東条英機大将・陸軍大臣、杉山元（すぎやまはじめ、すぎやまげん）大将・参謀総長、山田乙三大将・教育総監、島田繁太郎海軍大将・海軍大臣。禿で近視で口ひげを生やした東条は

陸軍大臣でありながら、さらに総理大臣と内務大臣を同時に併任することによって、二つの統制機関を乗り取った。

この太平洋でのホロコーストの直接的な責任がある軍国主義者について知るために、無意味に日本の仮面の下に隠されている者を探す必要はない。前述の暴力と弾圧の熟練者は他人のためにポーズをとる人形ではない。彼らは陸海軍による陰謀と大量殺人の傑出達成者であり、そのことによってピラミッドの最高位に立っている。彼らは将来、彼らが実行した事柄について、名誉、あるいは不名誉を平等に受けることになるだろう。

彼らの忠実な部下で、同じように八幡に信心深く、将来、粉砕されることさえなければ、アジアの主要な独裁者になりそうな人物がいる。その一人が寺内寿一大将であり、裕仁の垂れ幕を太平洋の南西地域に持って行く軍隊の軍隊長である。彼は 1863 年に初めてアメリカ船を砲撃した長州藩の出身であるが、当時、封建国からの希望があったならば、米国が尊皇の侍全員のちょんまげを切り落としておくことも出来ていた。彼の父である寺内正毅元帥陸軍大将もまた、先祖からの戦争崇拝の伝統に沿って、ある日本人の将官の指示の下で日本人と朝鮮人からなる犯罪組織による朝鮮の女王の謀殺後の朝鮮征服の策略に協力した。息子の寺内は北支那方面軍司令官として、父の遺志を引き継いだ。彼はナチス軍の能力の心酔者で、初期の訓練としてドイツに渡り、1939 年に北支那に戻っている。ナチ党大会に出席する予定だったが、ポーランド侵略の直後だったため、戦場でヒトラーの招待客となった。海軍で彼と同等の野心的を持つ人物が山本五十六連合艦隊司令長官である。他の軍国主義者として、陸海軍のピラミッド構造を支え、横浜、呉、佐世保、台湾の海軍基地と朝鮮、満州、占領下の中国と他の占領地域の指揮官がいる。

一般的に、最も頭脳の優れた者がトップに立ち、日本の軍国主義者を支配しているが、同じことは財閥には当てはまらない。財閥を取り換えることは困難で、軍国主義者によって関係が断たれて無くなった財閥はあるが、そうでない限り、代わることは殆どない。彼らへの報酬は軍国主義者と同様に、莫大であるが、その一方で競争する相手は極めて少ない。一時期、財閥は無期限に存続することになりそうだったが、5 ページからなる憲法の解釈に巡って、陸軍から不評を買い、残念ながらなくなった。

これまで、日本での経済のルールの正体を知るのに、謎は全くなかった。大日本帝国ではどこでも、会社や製造所の前に表札をかけている。三井、三菱、住友、安田の四つが主要なものである。これらに次ぐのが大倉、久原、浅野である。しかし、四大財閥が巨大で、少なくとも国の経済の半分を支配している。三菱を除けば、これらの名前は、個人名ではなく氏族名である。（三菱は岩崎による社名である。）封建時代の藩の制度が陸軍と海軍で広く残っているが、日本の経済構造の基盤にもなっている。しかし、軍国主義者の藩の関係は薄くなっているのに対して、財閥の絆は強固になっている。その理由は武力が頭脳に依存し、年齢によって能力が劣化するのに対して、経済力は資金に依存し、時と共に莫大に増える。だから

といって、頭脳は経済力には不要と言っているわけではない。しかし、経済力では武力とは異なり、頭脳を雇用することができる。産業界では経営と管理に分けることが出来るが、陸海軍では分けることはできない。財閥の氏族は、後に大蔵大臣になった池田成彬のような、部外者を雇用して、管理してもらうことは可能だったが、日本の軍国主義者は（例外はあるが）、雇用することはできなかった。日本の将官は自分自身がトップに立ち、指導者になるために奮闘するが、他人のためにやっているわけではない。これは財閥の氏族には当てはまらない。

財閥の氏族は最大な有能者を雇用して、仕事を管理することが出来たが、その有能者によって乗っ取られることは決してなかった。部外者はしばしば、採用されて氏族に吸収されるが、氏族が部外者に吸収されることはなかった。財閥氏族の支配は産業、金融、商業のあらゆる場所に進出しており、恐らく、世界でも最も強大で小数精鋭からなる寡頭経済であることで、経済状況が他国とは全く異なったものになっている。

財閥と軍国主義者間の摩擦が多く注目されているが、財閥の日本のアジアへの攻撃を可能にした役割についてはあまりにも注目されていない。実際、寡頭経済のうち、三井と三菱等は軍国主義者のアジアへの攻撃方針を強烈に支持し、そのことによって、直ぐに利益を得た。財閥の代理人はアジア大陸に国旗を持って行く軍国主義者を遥か後方から付いて行ったのではなかった。しばしば、彼らは率先して取り組み、中国での衝突の言い訳を軍隊にさせていた。満州「事変」後、巨大財閥は熱意をもって重工業を開始した。彼らはこれが、現在、陸海軍が行っている冒険を現実化するための基盤になるわけでは無いと主張していた。日本の重工業は陸海軍からの励ましと、国からの助成金を受けながら、西洋の主要な軍事力に対抗できる巨大な兵器の完成を目的として、確実に発展した。たとえ、三井、三菱、住友、安田等は、開発している巨大兵器を、彼らのために製造した国々に対しては使用しないことを望んでいたとしても、その望みは叶えられないことを既に知っていた。

彼らは誰よりも、軍国主義者がアジア征服を意図していることを知っており、日本による「大東亜共栄圏」統治という考えについても全く反対するつもりはなかった。彼らは単に大惨事に至ることを怖れて、「穏健」コースを進む方法を探した。三井家と岩崎家の人々からの外交政策が「穏健」コースを進むことを望むという私的な言葉を聞くと、彼らが「非穏健」の兵器を作った張本人であり、その兵器が日本の自国の領土防衛とは完全に不釣り合いであることをみると、非常に皮肉を感じる。彼らは分かっていながら、彼らの「非穏健」の兵器が日本の「穏健」政策をほとんど壊滅したことを認めようとはしなかった。彼らは絹を民主主義諸国に売っていたが、その交換として、原料と技術を手に入れて、その恩恵になった国々に敵対した巨大兵器を作った。これは歴史上、最も犯罪的な交換の一つだ。

軍国主義者と財閥間には激しい不和があったが、彼らの共通の目的の利益のため、多くは隠された。その共通の目的は、外国領土の征服であり、これは、東京の中心にある封建時代の

牢屋敷の向こうで神の役割を果たしている孤独で、邪悪な同盟の第三の男から祝福されていた。